

令和五年度 入学試験（公募推薦）問題（国語）

次の文章を読んで、後の【】～【】に答えなさい。

十一月の北海道は暗い。寒々として、陰鬱である。もつとも陰鬱なのは、なにも十一月にかぎったわけではない。真冬で、終日、雪の降り続く日も暗いし、真夏にも雨雲に厚く閉ざされているときもある。

いつの月でも暗い日はある。

だが、一年のうちで、十一月の暗さだけはカクベツ^(a)である。鉛色でぬりこめられた空を見ているだけで気が滅入る。

それはおそらく、十一月が冬への入り口であるからに違いない。この月が終ると、間違いなく冬が訪れる。その気の重さが、十一月をいつそう暗く、やりきれないものにさせる。

かつて僕が札幌に住んでいたころ、十一月になるとまつて心が揺れた。

一日、晴れたかと思うと、翌日はもう低い雲の下、終日冷雨が訪れる。それがときに雲^(A)になり、夜からさらに冷えこんで雪になつたりする。

朝、晴れていても庭は霜でおおわれ、その下で立枯れの草木が眠っている。それは白と褐色だけの、死の世界そのものとも見える。

わずかに葡萄棚が空に向かい、その黒い粒に朝の陽がさすとき、辛うじて生きているものが残っているのを知る。ななかまどの赤い実が、空に浮ぶただ一つの色である。

晴れても空の色には、もう秋のやわらかさはない。蒼^(B)といつても、それは死人の唇の灰色がかつた蒼に近く、秋空の【】にはほど遠い。

短い晴れ間のあと、また冷雨がきて、霧がくる。再び思い出したように晴れた日がきて、翌日はもう雪に変る。十一月の空は目まぐるしく動き、いつときといえども安心できない。

暗く、確実に冬へ向かう空を見ながら、「いつそ早く、冬になつて欲しい」と願つた。

冬になるなら、【】^(A)冬なるといい。野も山も街も、思いきり白い雪でおおわれるといい。

中途半端な生殺しはいやだ。

北国の十一月は、まさしく生殺しの季節である。暖かくなる当てもないのに、ときにふと晴れて見せ、もしや、という期待を抱かせて、また冷雨を浴びせる。

折角、夏への愛着を断ちきろうと心を決めたのに、ときに【】^(B)のよう陽光を届ける。それが訪れる度に、ようやく固まつた冬を迎える決心が鈍る。

この苛々した気持は、あきらめかけた人から、時に電話をかけられるのに似ている。もう別れようと決心がついたのに、その心を弄ぶ^(もあそぶ)ように声をかけてくる。

まさしく、十一月は「悪女」に違いない。あるいは「憎い男」というべきか。

【】⁽¹⁾、僕は十一月の北海道は嫌いである。僕が生まれ育った土地ではあるが、十一月だけはいただけない。

この月になると、僕はいつも「南の国へ行きたい」と思った。もっと太陽の明るい、色彩の豊かな南の街へ行きたいと願つた。

いま東京に住んで、ときには北海道に帰つても、その気持は変らない。十一月の定めのなさは、やはりいまも僕を苛立たせる。

北海道に行く人がいると、僕はきまつて「十一月だけはやめなさい」という。あの一寸刻みに冬へ向かう、思わせぶりでレイコク^(b)な季節の移ろいは許せない。

晴れては降り、降つては晴れる、空は暗く道は汚れる。それは雪どけどきの三月も同じである。

だが三月のほうはまだ許せる。それは間違なく季節が春に向かうからだ。冬に向かい、なお陰鬱な十一月とは違う。

この感覚は札幌がいかに近代化し、ビルが建ち並び、暖房が完備し、住みやすくなつたとしても変らない。自然はそんなことにかまわず、毎年確実に暗く、重い季節を送り届けてよこす。

おそらくどこの土地にも、感心しない季節というものがあるに違いない。このときだけは、初めて行く人にすすめたくないという季節である。東京でいえば、梅雨の六月とか、酷暑の八月とかがそうかもしれない。京都も八月とか、底冷えの一、二月は感心しない。東北や北陸はもちろん、気候のいいといわれる湘南や山陽道にも、それぞれにいやな季節があるにちがいない。
その土地に住む人々が、どうしても感心しないという季節がある。そしてそれは、その土地に住んだ人しか、わからないものかもしれない。

(渡辺淳一『十一月の憂鬱』)

【1】二重傍線部ⒶⒷの漢字の正しい読みを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問】**1** **2**

- 1 Ⓐ ①あられ ②ひょう ③かすみ ④みぞれ ⑤しぐれ
2 Ⓑ ①あい ②みどり ③こん ④むらさき ⑤あお

【2】空欄ⒶⒷに該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問】**3** **4**

- 3 Ⓐ ①かっちりと ②くつきりと ③きっかりと ④じっくりと ⑤ぴつたりと
4 Ⓑ ①なにしろ ②ともかく ③つねづね ④ともあれ ⑤なにより

【3】傍線部ⒶⒷの漢字として正しいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問】**5** **6**

- 5 Ⓐ ①確別 ②覚別 ③拡別 ④核別 ⑤格別
6 Ⓑ ①冷酷 ②冷刻 ③冷谷 ④冷哭 ⑤冷克

【4】空欄*と**に該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問】**7** **8**

- 7 * ①爽快感 ②透明感 ③清潔感 ④開放感 ⑤清澄感
8 ** ①気紛れ ②成り行き ③移り気 ④投げ遣り ⑤気休め

【5】この文章の筆者の作品として正しくないものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問】**9**

- 9 ①『麻醉』 ②『遠き落日』 ③『光と影』 ④『理由』 ⑤『失樂園』

【6】波線部のように記した筆者の思いとして、ふさわしいと考えられるものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問】**10**

- 10 ①その土地のことは、結局、その土地に住む人々に聞くのが一番だと改めて知られた、という思い。
②どこの土地にある感心しない季節だが、離れてみると妙に懐かしく迫ってくる、という思い。
③その土地に関しては、そこに住む人々の間にも様々な考え方があるのだ、という思い。
④感心しない季節の存在を改めて考え、それぞの土地のもつ奥の深さを再認識した、という思い。
⑤その土地に住んでいても、まだ知らないことは多いということを心に刻むべきだ、という思い。

二次の文章を読んで、後の【7】～【11】に答えなさい。

近ごろはスポーツ選手やタレントでも、「初心に返つて出直します」なんてことをいう。マンネリズムから脱して、はじめた時の新鮮な気持ちに返るというのは必要なことだし、結構な心がけでもある。だが、人間は、そうしたやすぐ昔に返れるものだろうか。過ぎ去った過去は、二度とふたたび返つてはこない。まして、出直すことなど不可能ではないかと私は思う。

「初心」という言葉が、いつごろから使われたか私は知らないが、もつとも重要視したのは、室町時代の世阿弥であろう。【a】のとおり、彼はお能を完成した人物で、『花伝書』その他多くの芸術論を遺している。その一つ、『花鏡』という書の中で、初心についてくわしく語っているのだが、ここではそのあらましだけを記しておく。

世阿弥は、まずそれを三つにわけて考えていた。

「初心忘るべからず」「時々の初心を忘るべからず」「老後の初心を忘るべからず」以上の一段階である。これをみてもわかるように、別に「初心」と名づけるものが、はじめに存在するわけではなく、常に自分（の芸）とともに成長し、老後に至るまで保ちつづけるものであることを語っている。別の言葉でいえば、初心はふり返るものではなく、その時々の状況に応じて変わつて行く、あるいは、その時々の芸を変わらせて行く【*】にひとしいものであつたと解していい。

なお、彼はそれぞれの初心について説明を加えている。——「初心忘るべからず」とは、若い時の初心を忘れないように保持していれば、老後になつてさまざまの得がある、昔おかした失敗を、くり返さずにすむからだ。

反対に、もし若年の未熟な芸を、その場かぎりで忘れてしまつたら、現在自分のいる位置（芸境）も、自覚することはできない。「（自分の芸の）上の所を忘るは、初心へかへる心をも知らず。初心へかへるは、能のさがる所なるべし」。

世阿弥にとって、初心とは、未熟な技の代名詞にほかならなかつた。今私たちが考えているような精神的な意味はなく、「新鮮な気持ち」などという漠然とした抽象論でもない。くり返していえば、人間が成長するためには、過去の数々の失敗や短所が【⑦】となる。だから未熟な初心時代を忘れてはならないといったのである。

「時々の初心」については、若年から、壯年を経て、老後に至るまで、その年齢と肉体条件にかなつたことをする。だが、もしその時かぎりで、仕捨て仕捨て忘れてしまうならば、今日ただいまの身に合つたことしかできなくなり、全体にわたる【b】を失つてしまふ。一つ一つの体験を、しっかりと身につけておく、それが「時々の初心」を忘れぬことであつた。

「老後の初心」についても同じことで、心身ともに衰えた老人に、似合つたやり方を発見する。老人にとっての工夫とは、無理をせず、何事もひかえ目に行うことによつて、若者には望めぬ【①】を發揮することができます。

「せぬならでは、手立てなきほどの大事を、老後にせんこと、初心にてはなきや」というわけで、世阿弥の初心は、あくまでも前向きで、過去へ返つて出直すことではなかつた。それが芸に若さを保つ所以でもあつた。

一芸に達した人は、皆そういう生きかたをしているに違ひない。先日テレビで、阪急の上田監督が、実にいいことをいつていた。このひと言の方が、私のたどたどしい解説より、はるかに世阿弥の「初心」というものをよく物語ついている。断つておくが、このことは野球の勝負とは何の関係もない。

「V3というけれども、それはもう過去のことで、今年は今年で新しくやります」

何でもないことだが、できにくいことである。

（白洲正子『初心忘るべからず』）

【7】 空欄⑦①に該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 11 12】

- | | | | | | | |
|----|---|----|----|----|----|----|
| 11 | ⑦ | ①源 | ②柱 | ③糧 | ④証 | ⑤礎 |
| 12 | ① | ①趣 | ②域 | ③風 | ④色 | ⑤味 |

【8】 傍線部「のとおり」の前に置く(a)として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問 13】

- 13 (a) ①周知 ②案内 ③定説 ④史実 ⑤承知

【9】 傍線部「わたる」に続く(b)として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問 14】

- 14 (b) ①立場 ②視野 ③足場 ④目線 ⑤展望

【10】 空欄*に該当する語を、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 15】

- 15 ①実行力 ②推進力 ③行動力 ④原動力 ⑤突破力

【11】 波線部のように記した筆者の思いとして、ふさわしいと考えられるものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問 16】

- 16 ①過去のことはあくまで過去のこととし、常にこれからをのみ見据えることが大切、という思い。
②充分な実績を残した人が常に初心を心がけている姿勢を見て、やはり見習わなければ、という思い。
③先を見据えることは大切だが、過去から学ぶべきこともあることを忘れてはならない、という思い。
④過去のことは自らの内におさめておき、これからを見る姿勢を常に示すべき、という思い。
⑤過去の実績にとらわれ過ぎず、常に初心を心がけることこそが実は最も難しい、という思い。

三 次の問【12】～【16】の記述のなかの□に用いる言葉としてふさわしいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【12】「今回の彼女の話は、確かに、辻褄が□いる。」【解答欄は問【17】】

【17】①固まって ②埋まって ③重なって ④含まれて ⑤合って

【13】「何と言つても、彼には、天賦の□がある。」【解答欄は問【18】】

【18】①粹 ②技 ③才 ④智 ⑤妙

【14】「私は最初から、□に身を投じるつもりだった。」【解答欄は問【19】】

【19】①渦中 ②佳中 ③家中 ④華中 ⑤河中

【15】「今回のようなミスは、□にして、繰り返されやすい。」【解答欄は問【20】】

【20】①蕭々 ②燦々 ③軽々 ④往々 ⑤早々

【16】「君たちには、もっと、目端を□人間になつてもらいたい。」【解答欄は問【21】】

【21】①揃える ②利かせる ③整える ④生かせる ⑤拡げる

四 次の問【17】～【21】のことわざの空欄の語としてふさわしいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【17】「明日ありとと思う□の仇桜」【解答欄は問【22】】

【22】①夢 ②紐 ③心 ④縞 ⑤絆

【18】「角を矯めて□を殺す」【解答欄は問【23】】

【23】①山羊 ②牛 ③羊 ④鹿 ⑤犀

【19】「小人閑居して□をなす」【解答欄は問【24】】

【24】①不善 ②不振 ③不義 ④不興 ⑤不実

【20】「覆水□に返らず」【解答欄は問【25】】

【25】①瓶 ②器 ③皿 ④盆 ⑤筒

【21】「□を尽くして天命を待つ」【解答欄は問【26】】

【26】①諸事 ②大事 ③雑事 ④時事 ⑤人事

五 次の問【22】～【26】の書き出しで始まる作品の正しい名称を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【22】「私はこれから、あまり世間に類例がないだろうと思われる私達夫婦の間柄に就いて、出来るだけ正直に、ざつくばらんに、有りのままの事実を書いて見ようと思います。」（谷崎潤一郎）【解答欄は問】**27**

- 【27】
①『細雪』
②『蓼食ふ虫』
③『春琴抄』
④『刺青』
⑤『痴人の愛』

【23】「なるべく、夜更けに着く汽車を選びたいと、三日間の収容所を出ると、わざと、敦賀の町で、一日ぶらぶらしていた。」（林芙美子）【解答欄は問】**28**

- 【28】
①『浮雲』
②『めし』
③『放浪記』
④『うず潮』
⑤『晚菊』

【24】「朝、食堂でスウップを一さじ、すっと吸つてお母さまが、『あ』と幽かな叫び声をお挙げになつた。」（太宰治）【解答欄は問】**29**

- 【29】
①『人間失格』
②『走れメロス』
③『斜陽』
④『津軽』
⑤『ヴィヨンの妻』

【25】「陽が傾き、潮が満ちはじめると、志摩半島の英虞湾に華麗な黄昏が訪れる。」（山崎豊子）【解答欄は問】**30**

- 【30】
①『沈まぬ太陽』
②『白い巨塔』
③『二つの祖国』
④『華麗なる一族』
⑤『大地の子』

【26】「志乃をつれて、深川へいった。識りあつて、まだまもないころのことである。」（三浦哲郎）【解答欄は問】**31**

- 【31】
①『少年讃歌』
②『忍ぶ川』
③『繭子ひとり』
④『白夜を旅する人々』
⑤『ユタと不思議な仲間たち』

【解答欄は問】**31**